

—人体因子の計測による背面ダーツ量及び肩傾斜角—

県立新潟女短大 平沢和子

目的 女子頸部体表を観察し、比較的变化の少ない頸付根圍に於いて体表に沿った横径、前後径(仮称)に著しい個体差を認め、又青年と老年との間に特徴ある差異を認めた。この人体因子を胴原型の衿ぐりに表現し、実証実験を行うには被験者各自に適合する胴原型が必要である。特に背面ダーツ量の不足及び肩傾斜角の不適合は、衿ぐりが浮き上り顕著な問題点である。そこで人体形態の計測による平面展開法によって背面ダーツ量、肩傾斜角を求める事を試み、ダーツ量の個体差と範圍を知り、展開に必要な計測項目を検討した。

方法 被験者 青年女子50名、背面裸体右半身。マルチン式計測器、試作計測器による計測30項目。布帛によって包み得る単曲面化した背面上部を計測値を用いて平面展開。試着実験 乳頭圍水平線、胴圍線、後正中線、頸付根線、肩線、袖付線における適合性の確認。実験布 不織布(厚さ0.23cm)。

結果 ①展開図の背面ダーツ量は、不織布の場合と、肩線に0.5cmのいせ量を想定した場合とを求めた。一般のダーツ量に比べ大きな値であり、バラツキも大きい。(0.5cm想定A.H.ダーツ元 12.4° , Max. 20° , Min. 0° , S.D. 5.7°) 0.5cmのいせ量は平均 3.3° のダーツ量を縮少した。②展開図の肩傾斜角 18.7° は計測肩角度 23.3° に比べ低い値を示し、両者の差は背面立体度との相関がみられ($r=0.54$)、肩ダーツにまとめた場合の肩傾斜角 23.34° は計測肩角度 23.3° とよく一致した。③肩傾斜角を決定するための計測項目は、展開図中最大長を示した「頸椎点直下0cm~15cmから肩先点」に92%が集中した。即ち肩甲骨上部の凸量と思われる。